

## トーマス・ハーディの「カstab リッジの町長」の特異性について

清 水 輝 雄

トーマス・ハーディは種々の点で異色の作家と言えるであろう。先ず彼は小説家としての筆を折った後詩人として再出発し、詩人としても高い評価をかちえた。また彼は当時の英国の文芸界から遊離した作家と言ってもよく、D. デービッドソンの言葉を借用すれば

‘He has no immediate predecessors; and though he has some imitators, no real followers as yet.’

「彼は直系の師もなく、模倣者はあってもまだ真の後継者もない」(注1)のである。しかし彼の特に目立つ特色は彼が

‘simultaneously ancient and modern’

「古い作家であると同時に新しい作家である」(注2)

ということであろう。彼は本質的には伝統的な物語作家であり、ビクトリア朝時代のセンセーショナル小説と共通する面が多分にあるが、一方では素朴な形態においてはあがあるが現代小説に見られる心理分析や ‘anti-realism’ 「反現実主義」の傾向も見出され、後期の作品では ‘self-destructive impulse’ 「自己破壊的衝動」(注3)の問題も取上げられ、その雰囲気も彼の「哲学」の影がさして暗い峻厳なものとなっている。近年ハーディ再評価の気運が高まり、毎年幾多の研究書が刊行されるのも彼が新旧両面をもつという特色に由来するものと考えられる。

「カstabリッジの町長」は彼の小説の中でも幾多の特異性をもった注目すべき作品である。「ダーバービル家のテス」や「日かげ者ジュード」の名声にかくれてややもすると目立たない存在になっているが、この作品は週刊誌に連載されたので読者の興味を惹くためプロットが極めて複雑な

のにもかかわらず構成が整っており、ギリシア悲劇を思わせる峻厳さと哀感を読者の心と与える点で英国の小説では極めて珍しいものと言える。同時に主役ヘンチャードの性格分析という新しい手法がはっきりとうかがわれる点で注目される。批評家の中にも B. C. ホーンバックのようにこの作品を彼の小説中で最も高く評価する者もあり(注4)、ハーディの最もすぐれた批評家の一人と言える A. J. ゲラードも次のように絶賛している。

‘Henchard—stands at the very summit of his creator’s achievement; his only tragic hero and one of the greatest tragic heroes in all fiction.’

「ヘンチャードは作者の力倆の頂点に立つもので彼の唯一の悲劇的主役であり、すべてのフィクションの中でも最も偉大な主役の一人である」(注5)

ここでは数多いハーディの研究書の中の主要なものを参照しつつこの作品のもつ特異性について次の三つの観点から検討を試みることにした。

## I 転換期の作品

前述の通りハーディは当時の文芸思潮から遊離し、「宿命的」と言われる彼の人生観も既に初期に作られた詩(注6)の中にも見出されて思想的進展が余り見られない作家であるとよく言われる。そしてその人生観も当時の哲学の影響によるよりは彼が若い頃から興味をもっていたバラードの影響によるものであると主張する批評家(注7)もある。しかしダーウィン、ショーペンハウエル、イブセン、フロイト等の影響下に激動の時代とも言える時期に創作活動を続けたハーディがその影響を余り受けなかったとはとうてい考えられないことで、M. D. ゼーベルの次の言葉が適切な見解と言えるであろう。

‘He was too much a child of his time to remain unmarked by the traits of nineteenth century art.’

「彼は余りにも彼の時代の子であり、19世紀芸術の特徴によって色づけられないではおれなかった」(注8)

ハーディの作品を年代順に読めばその間に著しい変遷の跡を認めないではおれないであろう。勿論作家の思想的進展をはっきり区分することは極めて困難であるが、小説家としてのハーディの生涯は次の三つの時期に大別できる。

第1期 模索期

第2期 転換期

第3期 円熟期

そして「カスタブリッジの町長」はこの転換期を代表する作品なのである。

(a) 模索期

ハーディはまだ建築家として修行中から文学特に詩に興味をもち詩集を耽読すると共に自分でも詩を作って雑誌に投稿したが、とりあげてもらえず、詩人としては自立できないと思い小説を手がけることを思い立った。しかし最初の作品「貧乏人と淑女」は強い社会批判を含んでいるとして出版社から出版を拒否された。たまたまある出版社の顧問をしていたジョージ・メレディスの助言を受け、それに基いて新たにセンセーショナル小説風の「非常手段」を書いた。ハーディが費用の一部を負担することで出版されたが、批評も売行きもはかばかしくなく小説家としての前途に自信を失い、一時は文学を捨てて再び建築家として立つことも考えた。幸い田園生活の描写が好評であったのでそれを力点として第二作「オランダ派風の風景画」という副題をつけた「緑の木かげ」を書き、次いで「一對の青い眼」を發表して次第に名声を博し、「遙かに狂乱の群を離れて」(1874年)に至ってようやく小説家としての地歩が確立された。そしてこの作品で初めて彼の故郷ドーセット州を中心とした地域に「ウエセックス」という名称を与えて彼独自の架空の世界を作り出した。そしてその田園生活の描写は正に

‘—an idyll of Dorset country life—a pastoral in prose’

「ドーセットの田園生活の牧歌——散文で書かれた田園詩」(注9)

で、読者の心を強く惹きつけ、ジョージ・エリオットの筆になるものでは

ないかと考えた批評家もあった程であった。

これまでの時期を模索期と呼ぶことができるであろう。当時の小説は一般家庭向けの雑誌に連載されるのが普通で、

‘The conception of the novelist as a complex and difficult artist writing deliberately for a trained public of ten or fifteen thousand readers simply did not exist.—A writer either achieved commercial success or was, as a novelist, a failure.’

「一万か一万五千人の訓練をつんだ読者を目標として書く複雑で難解な芸術家としての小説家という概念は全く存在しなかった。……作家は商業的に成功するか、さもなければ小説家としては失敗だった」(注10)のである。つまり小説は一般読者に娯楽を供与することが主目的であり、従って編集者は内容についてきびしい倫理的制約の下に置かれ、読者の批判に極めて神経質にならざるを得なかった。ハーディが半ば自嘲的に‘a good hand at a serial’「続き物を器用にこなす作家」(注11)で満足すると言っていたのもこの間の事情を物語るもので、生活の資を得るために口うるさい読者の御気謙をうかがいながら執筆していたのである。

#### (b) 転換期

「遙かに狂乱の群を離れて」の発表によって小説家としての地歩が確立されてからハーディはようやくある程度自分の人生観——哲学を織り込んだ新しい小説が書けるようになった。こうして彼の転換期が始まる。勿論まだ読者の意向を考慮からはずすことはできなかったが、この期を代表する主要作品「帰郷」と「カスタブリッジの町長」を読むとそれまでの作品との差異がはっきりと感知できるであろう。

まず「帰郷」では開巻第一章全体がこの作品の舞台であるだけでなく、そこに住む人々の運命を支配してこの作品の実質的主役とも言えるエグドン荒野の描写に費され、しかもその重苦しい雰囲気には一種の妖気さえただよい、これまでの明るい牧歌的な自然描写とは異質のもので、決して一般読者の興味を惹きつけるような自然の姿ではない。やがてそこではきびしい生存競争の現実が描き出され、批評家の指摘をまつまでもなくダーウ

インの影響がはっきり感じられる。

さらに第七章では「夜の女王」と題してヒロインのユーステイシア・ヴァイの紹介に全章を当て、彼女をギリシア神話の女神に擬しているのも注目に価するもので、ハーディの意図がそこにはっきりうかがわれる。ハーディは小説を従来の単なる茶の間の娯楽読物の位置から引上げて彼の人生観、運命観を織り込んだ真剣な読物として読者に提供しようと試みたのである。この意図が一層はっきりと表現された作品が「カスタブリッジの町長」である。

ハーディは建築家の修行時代からギリシア語やラテン語を学び、ギリシア悲劇やシェイクスピアの作品を広く読破し、その感化を強く受けていた。従って彼が新たに出発した小説の手本としてこれらの悲劇を選び、悲劇小説とも言うべき形をとったのも極めて自然な成行きと言える。F. B. ピエオンの言葉を借りて表現すれば、彼は

‘—to produce a great tragedy comparable in some respects to the epic, dramatic or narrative masterpieces of the past.’

「ある点において過去の叙事詩の、戯曲の、あるいは説話の傑作にも比肩しうる偉大な悲劇を作り出そう」(注12)

と試みたのである。そしてその試みに最初に成功した作品が「カスタブリッジの町長」であり、それが円熟期の「ダーパービル家のテス」、「日かげ者ジュード」へと引きつがれて行く。

ハーディのこの意図を最もよく表わしている例としてこの作品から一つの場合を引用してみよう。それは読者の心に忘れがたい深い感銘を与えるものである。

この作品の主役ヘンチャードが収獲の見込違い等からすべての財産と地位を失い、その上誤解がもとで最愛の娘エリザベス・ジューンにも見捨てられて淋しくエグドン荒野をさまよった後掘立小屋の中でひっそりと息を取引った時、彼の枕許の紙片に次の遺言状がしたためられてあった。

‘Michael Henchard’s will

‘That Elizabeth-Jane Farfrae be not told of my death, or made to grieve

on account of me.  
'& that I be not bury'd in consecrated ground.  
'& that no sexton be asked to toll the bell.  
'& that nobody is wished to see my dead body.  
'& that no murners walk behind me at my funeral.  
'& that no flours be planted on my grave.  
'& that no man remember me.  
'To this I put my name.

'Michael Henchard.'

「マイケル・ヘンチャードの遺言状

「娘のエリザベス・ジェーンに私の死を知らせて悲しませないこと  
「寺男に鐘をならすようにたのまないこと  
「何びとにも私の死体を見せないこと  
「会葬者が葬列に加わらないこと  
「私の墓に草花を植えないこと  
「何びとも私の名を記憶に留めないこと  
「これに署名する」

マイケル・ヘンチャード(注13)

この場面を読む者は皆悲劇のもつ壮厳さと哀感を感じないではおれないであろう。ハーディの意図は完全に達成されたと言える。D. セシルはこの遺言状に最大の賛辞を呈し、次のように言っているのも尤もとうなずける。

'He has achieved his purpose of giving a novel the imaginative force of poetry—and the greatest poetry, the poetry of Job.'

「彼は小説に詩……それも最も偉大な詩、ヨブ記の詩のもつ想像力を与えるという目的を達成した」(注14)

これに関連して注目すべきことがある。それはハーディの描く悲劇の世界では主役は古典悲劇と違って王侯貴族でなく農村社会の平凡な人間—ヘンチャードも乾草刈人夫の出身—だということである。彼は得意とする田園生活の中に題材を求めて悲劇を作り上げることに成功した。「森に住む

---

人々」の中にある次の言葉に彼の信念が表われている。

‘—from time to time, dramas of a grandeur and unity truly Sophoclean are enacted in the real, by virtue of the concentrated passions and closely-knit inter-dependence of the lives therein.’

「そこ（この森）での生活の集約された情熱と密接な相互依存の故にここでは時折真にソフォクレス的偉大さと統一をもつドラマが現実演じられる」（注15）

次にこの転換期の作品にはもう一つの注目すべき特色が見出される。それはハーディの関心が集団から個人に移って行ったことである。初期の作品では人物はほとんどいつも集団の一員という立場で描かれていたが、転換期の作品では個人として描かれるようになり、個人が興味の中心になっている。P. マイゼルの言っているように

‘—individual becomes isolated and renders himself the object of study.’

「個人が分離されて研究の対象となる」（注16）のである。「帰郷」の主役クリムについても既にそれが幾分表われているが、「カスタブリッジの町長」になると興味の中心がはっきりとヘンチャードの性格分析に移っている。勿論それは現代小説に見られる心理分析とは程遠いもので、主として行動や対話によるものであるが、とに角その分野に一步踏み込んだのである。

これが次の第三期の円熟期に入ると「ダーバービル家のテス」を経て「日かげ者ジュード」に至って一段と明かになり、ハーディは現代小説の先駆者の一人に数えられるようになったのである。

以上のことから「カスタブリッジの町長」が模索期から円熟期に進む橋渡しの時期である転換期の特色を最もよく表わした作品であることが知られるであろう。

## II 作品のテーマ

D. H. ロレンスの主要な小説のテーマはほとんど男女間の愛情問題で自分を‘Priest of Love’「愛の奉仕者」(注17)と呼んだのも適切な呼称と言えよう。ハーディにもこの呼称がそのままあてはまるのではなからうか。確かにD. セシルの言葉通り

‘Love is the dominating motive in Hardy’s stories—No one describes love more impressively than Hardy.’

「恋愛がハーディの小説の支配的なモチーフであり——彼以上に恋愛を印象的に書いた者はいない」(注18)

ロレンスがハーディに特別の関心をもち、ハーディ論を書いているのも尤もであると言える。ハーディの主要小説もほとんど男女間の愛情のもつれがテーマとなっており、定形的に分類して表示できる程である。その中において唯一の例外と言えるのが「カスタブリッジの町長」であり、それがこの作品の大きな特色となっている。

勿論この作品にもヘンチャードに見出されて支配人となったファーフリーとヘンチャードの娘との恋愛等愛情問題もいくつか出てくるが、何れも他の作品の場合のようにその中心テーマではなく、あくまでも添物の域を出ていない。愛情という点から見ればむしろヘンチャードの娘に対する父性愛の方が遙かに印象的である。

この作品の主要テーマは当時の英国に見られた社会現象であると考えられる批評家もある。D. ブラウンは穀物の輸入による農村の崩壊と農民の流出を重視してそれがこの小説の焦点であると言っている(注19)。また一方では新しいものと古いものの対立、交代を重点と見る者もある。即ち常に精密な計算に基く進歩的な経営法で穀物の売買を行うファーフリーと昔ながらのドンブリ勘定のヘンチャードの対立、そのがむしゃらな努力にもかかわらず遂に敗北して地位財産一切を新人のライバルファーフリーにうばわれてしまうことになり、ファーフリーが導入した新式の農業機械の到着



---

が新しいものの勝利のシンボルであると見るのである。しかしこれらの社会現象も確かに注目すべき問題であるが、主要テーマとは言えないであろう。この点に関しては F. B. ピニヨンの次の批評が適切な見解と思われる

‘Recent criticism has sometimes shown a tendency to read too much into the novel. Implicitly, the story presents a philosophy of life.... It is much more tempting to place undue stress on the social and economic background.’

「近年の批評はこの小説に余り多くの意味を含めようとする傾向がある。内在的にこの物語はある人生観を提示しているが……社会的経済的背景に不当に重点を置く弊に一層陥りやすい。」(注20)

しからばこの作品の中心テーマは何であろうか。ハーディ自身がこの作品に ‘The Life and Death of a Man of Character’ 「ある性格をもつ 1 人の男の生涯」という副題をつけており、またその中でノバリスの言葉 ‘Character is Fate’ 「性格こそ運命である」(注21)を引用しているが、ヘンチャードの性格こそこの小説の本当のテーマである。

ヘンチャードは「我」が非常に強く、他人の感情を無視して自説を押し通す、また激しやすく感情に駆られて行動する。その反面単純で人をすぐ信用し、迷信的で占い等にたより、善人で弱者に対しては憐みの情が深い。彼はこんな矛盾に充ちた性格の持主である。例をあげてみると少し頭の弱い使用人の怠慢をきびしく罰する一方ひそかにその老母の面倒を見てやったり、ライバルのファーフリーに決闘を挑んだ時相手の体力が自分に劣っていると見ると自分の片手をしばって立ち向うのである。

この作品はヘンチャードの性格的欠陥に起因する事件で始まり、その後もその性格が原因となって彼を没落へと追いやる事件が続発する。先ず乾草刈人夫のヘンチャードが職を求めて妻子と共に移動中にたまたま市が開かれていた村を通りかかり、そこの天幕小屋の食堂にはいって密売酒をしこたま飲み、それをとめようとした妻と言い争い、カッとなって居合わせた人達に妻子を競売で売ると言い出し、本当に 5 ギニーで売渡してしまうことで始まる。翌朝後悔して妻子を捜すが行方が分らず、近くの教会には

いって禁酒を誓い、カstabブリッジに落付き努力の甲斐あって二十年間に穀物商として財を築き、町長の地位まで手に入れる。そして偶然この町に来合わせたスコットランド人のファーフリーが気に入って支配人に採用し、一切の経営を任せる。しかし万事合理的に処理するファーフリーと意見が合わなくなり解職してしまう。ファーフリーは穀物商として独立し着々成果をあげる。これを見てヘンチャードは劣勢を挽回しようとあせり祈禱師の天気予報を信じて大量の穀物を思惑買いするが、予報がはずれて大損をし財産を失ってしまう。その間に競売で人手に渡した妻と娘が彼を捜してこの町に来ると彼は世評を一切気にせず彼等を暖く迎え入れて妻と再び結婚式をあげるといった人情味豊かな一面も見せる。その後彼に酒を飲ませて妻子を競売する破目に追込んだ食堂の女主人が落ぶれてこの町に流れこんで来て、ヘンチャードの競売事件を暴露したため彼は町民の信望を失い、町長の地位もファーフリーに取って替られてしまう。妻とも死別し、誤解がもとで娘も彼の許を去りファーフリーと結婚する。その結婚式の日落ちぶれ果てた彼が結婚を祝福しようと娘を訪れるが、冷くあしらわれて絶望し、淋しく放浪の旅に出て前述の悲壮な遺言状を残して死んで行く。

ヘンチャードの悲運は天候の見通しを誤って大損害を蒙ったという偶然の出来事もあったが、それとてもファーフリーとの対抗心のあせりから祈禱師の言葉を過信したことから生じたもので、結局彼の失敗の責任はすべて彼自身の性格に帰せられるべきものであり、次のF. B. ピニヨンの言葉通りと言える。

‘He is his own enemy, and is destined to fall from his own weakness.’

「自分自身が彼の敵であり、自分の弱点の故に没落するように運命づけられている」(注22)

ハーディの他の作品、例えば「帰郷」のクリムやテス、ジュード等どの主役の場合にも勿論それぞれの性格がかなりの重要性をもっているが、彼等には環境や経済的要因等外的条件の圧力が大きな影響力をもっており、ヘンチャードの場合とは事情が異っている。

「カstabブリッジの町長」のテーマはこのようにヘンチャードの性格の

問題であるが、それは観点を変えれば彼の「罪と罰」の問題と言える。酒に酔った結果とはいえ妻子を競売したことは彼の犯した「罪」であり、その後はずっとそれを後悔し、その影におびえて暮らすことになるのが、そのつぐない即ち「罰」である。J. I. M. スチュアートが指摘しているように(注23)それはドストイェフスキーやコンラッドの「罪と罰」とは異質のものであっても、またこの作品がよく比較される「オイディプス王」のそれとも違ったものであっても、とに角ハーディが取り上げた「罪と罰」である。ヘンチャードはA. J. ゲラードが言うように

‘—a man of character obsessed by guilt and so committed to his own destruction.’

「罪の意識にとりつかれ、その結果自己破壊に専念する人間」(注24)となり、

‘—castigate himself with the thorns’

「いばらで自分自身を折かんしよう」(注25)とする固い決意で常に行動していた。こうしてハーディは初めて現代小説の一つの重要なモチーフである「自己破壊の衝動」の問題を取り上げるのである。それは心理描写とといった精緻な手法によるものではないが、とに角その問題に立ち向っている。

その例はこの作品の種々な場面に見出されるが、特に目立った一例をあげてみよう。既にヘンチャードがすべての地位財産を失い、かつて自分の支配人であったファーフリーに乾草刈人夫として雇われている時王族の一人がカスタブリッジの町に立寄るといふ大事件が起る。市長になったファーフリー以下町の人々が盛装して歓迎する中を王族の馬車が到着すると、よれよれの普段着姿のヘンチャードが左手に手製のユニオン・ジャックをもち、右手を差し延べながら突然馬車に近づいて行って居並ぶ人々を驚かす。ファーフリーが急いで彼をつかまえ、引きもどして何とかおさまる。町民環視の中でこのように自分を辱かせる行為に出たのはファーフリーに対する敵がい心からでもあろうが、自分を折かんしようとする潜在的衝動の表われとしか考えられない行動であろう。

このようにテーマの面から考察しても、この小説が他のものと趣を異にした特異な作品であることが知られるであろう。

### III 自然の役割

ハーディの小説に見られる自然描写は批評家すべてが絶賛の言葉を惜しまない彼の特技と言える。彼は自分が生れ育ったドーセット地方を限りない愛着と鋭い観察眼をもって眺めた。彼が「帰郷」の主演クリムについて述べた次の言葉はそのまま彼自身に当てはまるものであろう。

‘If anyone knew the heath well it was Clym, he was permeated with its odours. He might be said to be its product.’

「誰かその荒野をよく知る者がいるとしたら、それはクリムであった。彼の体にはその景色、実質、香気がしみ込んでいた。彼はその産物と言ってもよかった。」(注26)

彼の初期の作品は、「緑の木かげ」の副題の通りオランダ派画家の風景画のような美しい自然の中で展開される楽しいドラマであった。しかし時の経過と共に色調も変り、思想家ハーディの人生観を反映して暗い影を帯びようになり、同時にその役割も初期の作品の場合のような単なる美しい背景から次第に物語の中に入り込んで来て、まるで一人の登場人物のように物語の進展にかかわるようになり、更に後期の作品になると自然物が人間の運命を支配する造物主の役割さえ受持つような印象を受けるようになる。

彼の作品からその顕著な例を引用してみると「帰郷」のエグドン荒野と「ダーバービル家のテス」のトールボセイズ農場の場合である。この2つは明暗正反対の雰囲気をもっているが、そこに住む人々は共に樹木や動物と同じようにすべての運命を周囲の自然に支配されているように読者は感じるであろう。トールボセイズ農場では恋愛でさえもその自然の影響を受けて芽生え生育する。

‘Amid the oozing fatness and warm ferments of the Froom Vale, at a

season when the rush of juices could almost be heard below the hiss of fertilization, it was impossible that the most fanciful love should not grow passionate. The ready bosoms existing there were impregnated by their surroundings.'

「フルームの谷のにじみ出る肥沃さとあたたかい発酵のさなか、しゅうしゅう音を立てて受精作用がおこなわれる下で、生物の体内を液体のかけめぐる音がきこえるといってもよい季節には、どんな気まぐれな恋でも情熱的にならぬわけにはいかない。土地の若い人々の胸は、こうした四囲の空気を吸いこんでときめくのだった。」(注27)

このような自然の扱い方はハーディの *antirealism* 「反現実主義」の立場に由来するものと考えられ、小説においては彼独自の手法と言えるであろう。彼の妻の手になる伝記の中のメモでハーディは次のように言っている。

'Art is a disproportioning—of realities.—Hence realism is not Art!'

「芸術とは現実を……変形することである。……従って現実主義は芸術とは言えない」(注28)

批評家も指摘しているように彼が強く影響を受けたと見られるバラードの反現実的、神秘的雰囲気を超自然的なものの代りに自然物を用いて小説の世界に再現しようとしてハーディが試みた手法と言える。

さて「カスタブリッジの町長」の場合はこの自然はどんな役割を果しているのであろうか。カスタブリッジは町ではあるが、

'—the complement of the rural life around; not its urban opposite.'

「周囲の田園生活の補足物と言ってもよいもので、都市的な対蹠物ではない。」(注29)

また

'Casterbridge was in most respects but the pole, focus or nerve-knot of the surrounding country life.'

「カスタブリッジは多くの点で周囲の田園生活の極、焦点または神経の中枢」(注30)

であり、田園の延長と言ってもよく、他の作品と同じく美しい自然の中に

包まれて物語が進展してゆく処であるが、この作品では注目に値する自然描写はほとんどなく、まして人間の運命を支配するような役割は全く与えられていない。それは最後の小説「日かげ者ジュード」の場合と同様である。この両作品の場合ハーディの関心が余りにも強く他の問題に惹かれて自然の描写に注意を向ける余力がなかったものと考えられる。そしてそれはまた転換期以降の作品で彼の興味の対象が集団から個人へ移ったという前述の事実とも密接な関係をもつものである。ヘンチャードの場合はその性格の分析とそれに起因する出来事にハーディの注意が集中されたのであり、ジュードの場合は彼と性格が対蹠的な妻のスーとの相剋、さらにはジュードの向学心を妨げる社会的制約等に興味が惹かれて自然には出番が与えられなかったのである。P. マイゼルがヘンチャードについて述べた次の言葉がこの間の事情を最もよく説明しているものと言ってよいであろう。

**“The impulses of the earlier book that found expression in the psychological symbolic landscape of the heath are now contained within a single individual—even his present ability to use symbolic landscape breaks down before the bare emotion of character itself.”**

「荒野の心理的な象徴的風景の中に表現された前書「帰郷」の衝動は今や個人の中に集約された。……象徴的風景を用いようとする彼の能力さえも性格のもつむき出しの感動の前ではざ折してしまうのである。」

(注31)

このようにハーディの作品の中で自然が果している役割という点から見ても「カスタブリッジの町長」は特異の作品とすることができる。

## 結 語

これまで三項目に分けて「カスタブリッジの町長」がハーディの小説の中で異色の作品であることを検討してきたが、その過程で彼が伝統的な家庭小説の域を脱して現代小説の領域に一步踏み入れた作家であること、再びA. J. ゲラードの言葉を借用して表現すれば

---

'Hardy the novelist is a major transitional figure between the popular entertainers of Victorian fiction and the serious, visionary, often symbolizing novelists of today.'

「小説家ハーディはビクトリア朝時代の通俗的娯楽小説家と今日の真剣で幻想的、しばしば象徴的である小説家との間の転換期に立つ主要な人物」(注32)

であることが明かにされたが、前述の通りこの小説はそのハーディの小説家としての転換期に立つ作品であるから換言すれば「カスタブリッジの町長」はビクトリア朝時代の伝統的な小説と現代の新しい小説との丁度境界線上に立つ注目すべき作品ということになる。従ってこの小説は特異性をもっているということの他にこの意味でも高く評価されるべき作品と言えるであろう。

#### NOTES

- (1) Hardy: A Collection of Critical Essays (Edited by A.J. Guerard p.2)
- (2) *ibid.*(Introduction by A.J. Guerard p.9)
- (3) Thomas Hardy (A.J. Guerard p.146)
- (4) The Metaphor of Chance (B.C. Hornback p.106)
- (5) Thomas Hardy (A.J. Guerard p.146)
- (6) 'Hap': a poem written in 1866
- (7) Douglas Brown, Jean Brooks, J.I.M. Stewart, etc.
- (8) Hardy: A Collection of Critical Essays (Edited by A.J. Guerard p.146)
- (9) Thomas Hardy (R.A. Scott-James p.9)
- (10) Thomas Hardy (A.J. Guerard p.35)
- (11) The Life of Thomas Hardy (Florence E. Hardy p.100)
- (12) Hardy: The Mayor of Casterbridge (F.B. Pinion p.1)
- (13) The Mayor of Casterbridge (Chapter XLV)
- (14) Hardy the Novelist (David Cecil p.109)
- (15) The Woodlanders (Chapter 1)
- (16) Thomas Hardy: The Return of the Repressed (Perry Meisel p.23)
- (17) The title of a biography of D.H. Lawrence by H.T. Moore, quoted from a

letter written by Lawrence

- (18) Hardy the Novelist (David Cecil p.108)  
 (19) Thomas Hardy (Douglas Brown p.70)  
 (20) Hardy: The Mayor of Casterbridge (F.B. Pinion p.2)  
 (21) The Mayor of Casterbridge (Chapter XVII)  
 (22) Hardy: The Mayor of Casterbridge (F.B. Pinion p.15)  
 (23) Thomas Hardy (J.I.M. Stewart p.121)  
 (24) Thomas Hardy (A.J. Guerard p.146)  
 (25) The Mayor of Casterbridge (Chapter XIII)  
 (26) The Return of the Native (Book III Chapter 2)  
 (27) Tess of the d'Urbervilles (Phase III Chapter XXIV)  
 (石川欣一氏の訳文を引用した)  
 (28) The Life of Thomas Hardy (F.E. Hardy p. 229)  
 (29) The Mayor of Casterbridge (Chapter IX)  
 (30) ibid.  
 (31) Thomas Hardy: The Return of the Repressed (Perry Meisel p. 91-92)  
 (32) Hardy: A Collection of Critical Essays (Introduction by A.J. Guerard p.3)

(付録1) 主要小説のリスト

(題名)	(刊行年)	(和訳名)
Desperate Remedies	(1871)	非常手段
Under the Greenwood Tree	(1872)	緑の木かげ
A Pair of Blue Eyes	(1873)	一對の青い眼
Far from the Madding Crowd	(1874)	遙かに狂乱の群を離れて
The Return of the Native	(1878)	帰郷
The Mayor of Casterbridge	(1886)	カスタブリッジの町長
The Woodlanders	(1887)	森に住む人々
Tess of the d'Urbervilles	(1891)	ダーバービル家のテス
Jude the Obscure	(1896)	日かげ者ジュード

(付録2) 主要参考文献のリスト

(題名)	(著者名)	(刊行年)
The Life of Thomas Hardy	(Florence E. Hardy)	(1928)
Hardy the Novelist	(David Cecil)	(1943)
Thomas Hardy	(Douglas Brown)	(1954)
Thomas Hardy	(Albert J. Guerard)	(1964)



---

Hardy: A Collection of Critical Essays	(Edited by A.J. Guerard)	(1965)
Hardy: The Mayor of Casterbridge	(F.B. Pinion)	(1966)
Thomas Hardy	(J.I.M. Stewart)	(1971)
Thomas Hardy: The Poetic Structure	(Jean Brooks)	(1971)
The Metaphor of Chance	(B.C. Hornback)	(1971)
Thomas Hardy: The Return of the Repressed	(Perry Meisel)	(1972)
Thomas Hardy	(R.A. Scott-James)	(1974)